

天声人語

夜ごと月の輝きが増す季節である。月といえば「餅をつくウサギ」がすぐ浮かぶが、海外では「大きな力二」「ほえるライオン」「本を読む老女」などに名ぞらえる。地域や民族によりまるで異なる絵柄を読み取ってきた▼同じ方も変わる。南極へ2度観測に赴いた名古屋市科学館の小塩哲朗学芸員(50)は言う。「南極から観察すると、月のウサギは仰向けに寝そべっていました。餅つき中には見えません」▼極地で撮った写真の中に、観測船「しらせ」から見た月を収めた1枚がある。真っ白な氷山の向こうに、赤茶けた色の月が浮かぶ。紫紺の空との対比が神秘的だ。蜃氣樓の現象で、形は横にひしやげている。日本で見る月とはまるで違う▼遠く仰ぐばかりの存在だったが、近年、月は空前の探査ブームのさなかにある。6年前に月面探査を成し遂げた中国に続き、インドも、探査機をきょう月の南極に着陸させる予定だ。成功すれば、旧ソ連、米国と合わせて4カ国目の月面到達となる▼そのインドには「月のウサギ」の源流のような昔話がある。修行僧に捧げる食べ物がないことを悲しんだウサギが、燃えさかる火に飛び込み、わが身を捧げる。僧が実は神様で、ウサギの徳をたたえるため、月の表面にその全身像を刻んだ▼時代を超えて、文化を超え、多彩な空想をかき立ててきた月の不思議な力を思う。資源はあるか、人が住めるのか。これからの大探査でどんなことがわかるのだろう。

2019・9・7